

## 第4章 結語

約2000年前にローマの構造技術者 Vitruvius が構造物の3大要素として唱えた用,強,美 (Utilitas, Firmistas and Venustas) にもう一要素、金 (Monetas?) を加えるべきであると思う。これらの要素の中,"美"以外は割合に優劣の比較が付け易いが、美については主観の要素が強く、また、同一人物でも置かれた立場や経済状態によっても見方が変わり得る。個人住宅などと異なり、橋は公共性が強いので、自信を持って先覚的な物を作っても現在の大衆から嫌われる様な物はやはり避けなければならない。

日本の国が豊かになって、国民がアメニティーを求める様になった事は事実であるが、個人が本当に精神的にも豊かになっているかどうかは疑わしい。世界から金持ちと思われても、寿司詰めの通勤電車で顔を引きつらせて、長い時間我慢する姿はとても文化的とは言えない。土地や家屋に高い金を払っても、結局は兎小屋の域を出ない住みかでは、これまた豊かさから程遠い。

そもそも審美眼と言うものは本当の意味の豊かな環境と豊かな暮らし（もしかすると一代では駄目かもしれない）から醸し出されるものではないだろうか。文化先進国のヨーロッパの諸都市（決して巨大ではない）の多くは既に美しい都市環境が出来上がっているのだから、橋を作る場合にもそれに調和してデザインすればよいが、日本の場合、古都でもない限り、普通、現在の環境に合わせるのでは無く、未来の整備された環境を予想して、それに調和する様に構造物を造ることになろう。その意味からは困難を伴うが、また、自由度があるとも言える。

日本でも、近頃、だいぶ美化の意識は高まって来たが、まだ、ちぐはぐな面が諸処に見られる。例えば、六本木の高架橋は修景が優れている例として挙げられるが、その交差点近辺では電柱と電線が蜘蛛の巣の様に入り乱れている。町の人々は橋の美化を望んでいながら、なぜ手近かな電柱や電線に手を付けないのであろうか。順次、美化して行く計画なのかも知れないが、橋、建築、街路など総てが調和して美化されてこそ、地域的美観は達成すると考えられる。六本木近辺を流れている金は膨大なものである筈であるから、これは経済問題と言うより、むしろ民度の問題なのかも知れない。最近、名古屋に誠に美しい歩道橋が完成したが、早速、スプレーで落書きされていた。落書きした者は書き初めと思って得意になっているかも知れないが、これもまた、民度の問題であろう。

高架橋の存在そのものが、そもそも都市の理想像にはそぐわない。鬱陶しいし、その下は薄暗い。景観上、在った方が良いと言う物では決してないが、いまや多くの都市の必需品となっている。防音壁や排水管なども総てそうである。しかしバリの中心部は不便を感じつつも、高架橋の建設を許していない。

本報告書を纏めるに当たり、各章を分担して執筆した。全体を通して委員全員の意見を徴したが、この結語を含めて、やはり執筆者の意向が強く出ている事は否めない。こと美観に関しては特にその傾向が著しくなるが、執筆者の意向を敢えて余り撓める事をしなかったのも、色々な考えがあると思って読んで頂きたい。例えば、構造体のフォームそのものの美しさで行くべきであると言う、いわば、ヌードの美で行く事は理想であり、Maillartの作品などはその典型であるが、排水管や防音壁、また、補修の跡などを考えるとまとめて覆うのも利口な方法であろう。結局、時と場合に応じて適切な方法を選べば良いと思う。例えば、樋を隠すばかりでなく、逆に形良く強調してはどうかと言う提案もある(3-3-(4))。

3章1節には具体的な修景の例や提案が多く述べられている。古い構造物で欠点も汚れも隠されて見違える様に美しくなった例が多々あるが、これがやがて再び汚れて来たり、傷んで来るかも知れない。そこで修景の維持管理と言う新しい問題が生じてくるが、この問題にも良く耐える方法こそ修景の成功例になると思われる。

美観には調和が重要であると言われるが、決して同じであったり、標準化すべきであると言う事ではない。それでは文化的厚みが失われる。健全な社会とは老人から幼児まで一緒に揃って豊かに暮らして居る様な社会であり、そこには元気な者達の間で助けられる人々や老人も居る。都市の構造物も同様な意味で各時代に美しく、良いと思って造られた新旧様々の構造物が共存する姿が好ましいと考えられる。丁寧なりハビリティションを受けつつ、社会に奉仕している老橋が在った方がかえって豊かな景観を醸し出すであろう。

修景を主体に話を進めて来たが、修景の問題を扱えば、当然、新しく造る物への提案も生じて来る。3章2節はその様な問題に関する提言に当たった。

(阿部英彦)